

古河公方館跡(古河市)

築城年代:享徳4年(1455年)、築城者:足利成氏

古河公方館跡は古河総合公園内に保存されており、前方はその管理棟/手前に小川が流れている



こんな塩梅



管理棟の向こうに古河公方館跡北側の御所沼が見える



左手が古河公方館跡



鎌倉を終われることとなってしまった鎌倉公方の成氏が居館としたのが、この鴻巣館(古河公方館)/池に囲まれた比高4mほどの半島状台地を利用した水城に近い形態のもの/この館では要害性が心もとないため、やがて古河公方の成氏は、古河城を築いてそちらに移っていくこととなる/古河公方館は池(御所沼)に囲まれた「公方様の森」のエリアが一ノ曲輪/その右手の民家園・茶畑のあるエリアが二ノ曲輪のようだ

上が北

可総合公園 のご案内MAP





その茶畑の辺りから西方向に「公方様の森」を見たところ/右前方には民家園が見える



そこで左手を見ると「芋ころがし坂」の標柱が立っている/この坂がそのようだ



これが民家園の旧飛田家住宅/数年前までは十念寺があったと云う



国指定重要文化財

旧飛田家住宅

昭和四十三年四月二十五日指定
古河市大字鴻ノ巣一〇二四番地

この民家は、もと茨城県久慈郡金砂郷村大字岩手の飛田氏の所有であったが、事情により当地に移築したものである。

建築年代は、飛田家の初代夫婦のものと思われる位牌に延享元年（一七四四）及び寛延元年（一七四八）の没年が記されており、それに構造手法などを考えあわせると、一八世紀前半と推測される。

この住宅は、東北から常陸地方北部にかけてよく見られるいわゆる曲り屋で、土間の「うまや」部分が突出し「し」字形をなしている。居室の方は、土間に続いて、まず広い「板の間」があり、その片隅には小さな「へや」が設けられており、さらにその奥には前室のある「ざしき」が並ぶ形式である。

建設後は何回もの改造及び補修を経てきているものの、構造、平面等にはそれほどの変化はなく、よく旧態を残している。また現在茨城県下で知られる曲り屋形式の中で、最も古いものとして、昭和四十三年国の文化財指定を受けている。

なお、移築に当たっては建築当初の型に復元するという文化庁の方針で行った。

昭和五十九年十一月

古河市教育委員会



こちらは旧中山家住宅



茨城県指定有形文化財

旧中山なかやま家住宅

昭和四十八年八月二十七日指定
古河市大字鴻巣一〇四五番地

この民家は、もと茨城県岩井市大字辺田の中山氏の所有であったが、氏の寄贈により当地に移築したものである。中山家は、武士の出身で、江戸時代初期、辺田村に移住し帰農したといわれ、代々辺田村の組頭などを勤めた旧家である。

この住宅は、猿島地方に多く見られる直屋といわれる型で、平面は東側の広い「どま」と、中央の無目（溝なし）の敷居に分けられた「ひろま」と西側の前室のある「どしき」とその裏の「なんど」からなり、桁行九間半梁間五間半の大型農家である。

住宅の建築年代については確証を欠くが、今回の解体修理中に発見された床板裏面の墨書に「延宝二歳寅二日……」とあったことから延宝二年（一六七四）に建てられた可能性が強い。

その後、幾度かの改造及び補修を経てきているが、幸い軸部は当初の状態で残存し、保存状態も良好で猿島地方の大型農家の典型として、昭和四十八年茨城県の文化財指定を受けている。

なお、移築に当たっては建築当初の型に復元するという方針で行なった。

平成十二年七月

古河市教育委員会



これは民家園の外れに立つ城址碑と案内板



「史跡 古河公方館址」とある



こちらにも「史跡 古河公方館趾」の標柱と説明坂



古河公方足利成氏館は古河城本丸から南東へ1km程度離れた古河市鴻巣にあり、御所沼に突き出た半島状台地に築かれた連郭式の中世城館で、1590年(天正18年)以降は最後の古河公方・足利義氏の娘である氏姫(氏女)の居館となったと云う

茨城県指定文化財

史跡 古河公方足利成氏館跡

昭和八年七月十八日指定

これは御所沼につきでた半島状となっており、古河公方足利成氏以来古河城の別荘があった跡である。鴻巣には、その間修築していた古河城にうつりました。成氏が鎌倉からこの地に移座したのは康正元年(一四五五年)で、二年後には、その後、古河公方義氏・政氏・高基・晴氏・義氏にいたる百二十余年の間、古河は関東一円にわたり重要な位置を占めていきます。この館も、義氏の遺児氏女を主として江戸時代初期までありました。大正時代、渡良瀬川改修工事で、古河城跡の大半が河川敷となつてしまい、ここ鴻巣御所跡は、往時をしのぶ史跡として意義深いものがあります。この碑の西と東には、当時の空堀と土塁をとどめています。

(室町幕府)
 ①足利義氏
 (鎌倉公方)
 ②義詮 ③義満 ④義持 ⑧義政 ⑫義昭
 △基氏 ①△氏満 ②△満兼 ③△持氏 ④△成氏
 (古河公方)
 ①足利成氏 ②政氏 ③高基 ④晴氏 ⑤義氏
 万寿王丸

平成三

ここは城址碑から公方様の森(一ノ曲輪)へ向かう所にある堀切と土塁跡/土橋状の虎口ということか



右手の堀切を見たところ



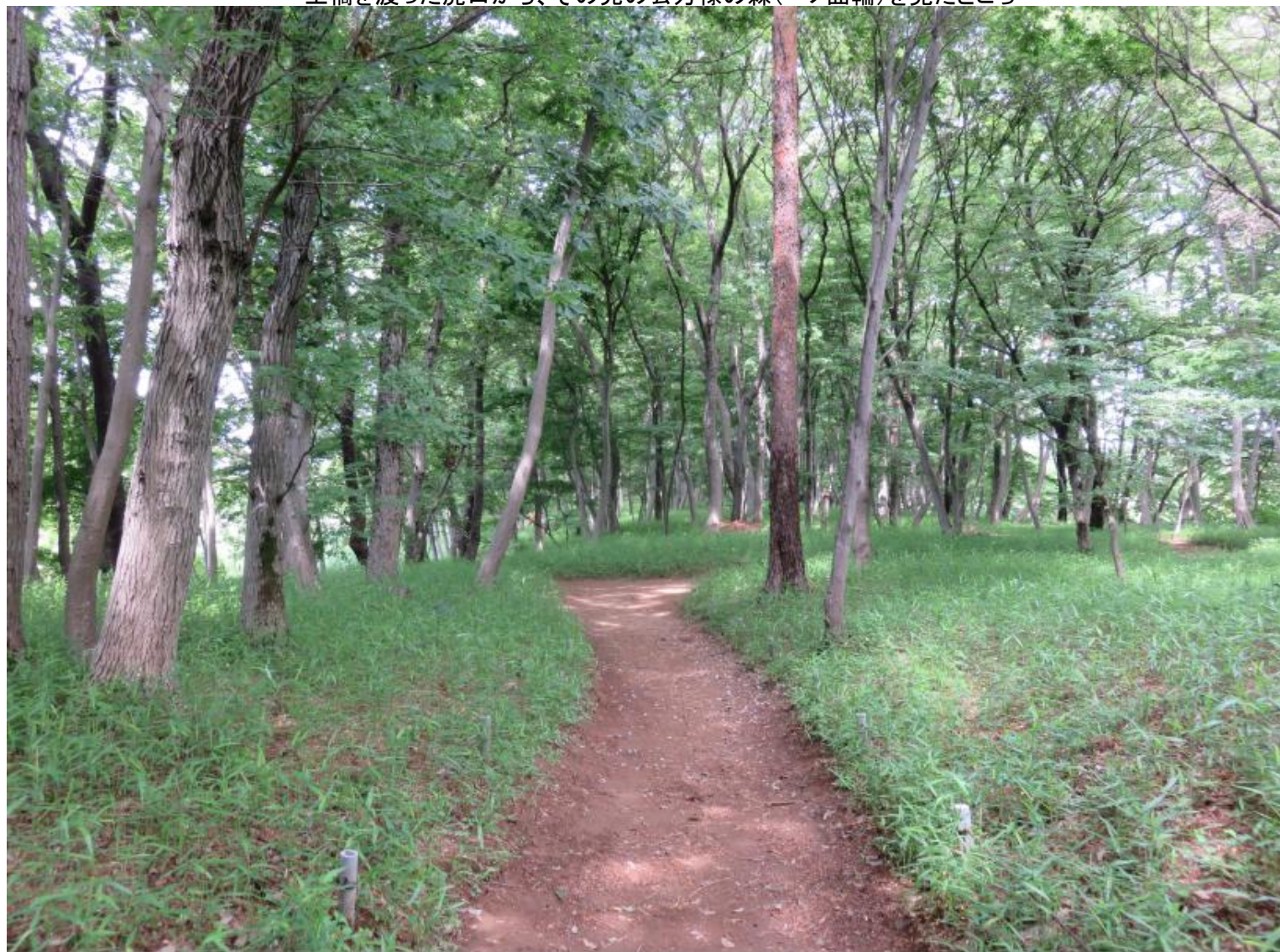
その堀底から土橋を見たところ/左手が城址碑のあった二ノ曲輪/右手が公方様の森(一ノ曲輪)



その先の堀切/大分浅くなってしまっている



土橋を渡った虎口から、その先の公方様の森(一ノ曲輪)を見たところ



振り返って、土橋を見たところ/前方は二ノ曲輪



右手を見たところ/この角度から見ると、それなりに堀切りの様子が良く分かる



同じく、左手に堀切りを見たところ



さて、ここがーノ曲輪のエリア



左手に御所沼(一ノ曲輪を守る水堀の役目)が見える



同様に右手にも御所沼が見える



公方様の森(一ノ曲輪)の西端まで進んで、振り返って一ノ曲輪のエリアを見たところ



えなまつ

さて、これが天神橋/両脇には赤松の木が植えられており、橋の南側(左手)が「天神松」、北側(右手)が「胞衣松」と云うそうな



天神橋を渡る



天神橋を渡って、振り返って公方様の森(一ノ曲輪)を見たところ



そこで左手を見たところ/前方に管理棟が見える



同じく右手を見たところ



筑波見の丘というマウンドがある



そのマウンドから御所沼に囲まれた公方様の森(一ノ曲輪)を見たところ



これは干拓史を伝える排水ポンプ



御所沼干拓地を水害から守った排水ポンプ

こしよめま

(古河市新久田九二四番地)

前所在地	旧御所沼揚排水機場
形式	横軸両吸込渦巻ポンプ
製造年	昭和二四年
口径	八〇〇ミリメートル
揚水量	毎分八〇立方メートル
総揚程	七・五メートル

五代鎌倉公方足利成氏が一四五五年に鎌倉から古河に移り初代古河公方となる。以後、約一三〇年間、古河は東都とも言われ、東国の政治文化の中心となり、古河公方とその子孫たちが、一七五年間、鴻巣御所(古河公方館址)を使用した。そして、何時の頃からか鴻巣御所の周囲に広がる沼を御所沼と呼ぶようになった。江戸時代、御所沼は古河城主の園遊池にもなり、古河桃林は御所沼に縁取られて名所となった。

しかし、そんな古河の歴史の原点とも言えるこの地は、渡良瀬川の後背湿地で川の氾濫や大雨時の内水氾濫にたえず悩まされていた。これらの水害から解放されるには、渡良瀬川改修工事(明治四三年から大正一四年)と御所沼干拓工事(昭和二二年から昭和二七年)の完成を待たねばならなかった。

戦後の食糧難もあって実現した御所沼干拓工事は、受益面積約七〇ヘクタール、揚排水機として四台のポンプを備え、灌漑用水を供給し、この排水ポンプで干拓地を水害から守ったのである。そして、念願の米作りを可能にしたが、同時に古河の悠久の歴史を紡いできた御所沼を消滅させた工事でもあった。しかし、昭和四七年に当公園が都市計画決定され、平成八年には古河公方館

址の舌状台地の森を囲むように御所沼の一部が復元された。半世紀以上の間、御所沼の干拓地を水害から守った排水ポンプは、老朽化によりその役目を終え、復元された御所沼のほとりに御所沼転生の干拓史を伝える証として保存展示された。

このポンプの吐出口は、今はなき旧御所沼揚排水機場を向いている。

平成二八年一〇月

古河公方公園

さて、相ノ谷橋を渡る



左手を見たところ/御所沼は、第二次世界大戦後に干拓・埋立されて消滅した後、1996年(平成8年)に復現されたもので、古河公方の時代と比較すると、大幅に縮小されていると云う



相ノ谷橋を渡って、振り返って見たところ



左手を見ると新久田道と記された標柱がある



さて、右手方向に進む



ここは御所沼に浮かぶ浮島へ渡る「かわうそ橋」



ここが浮島



そこから公方様の森(一ノ曲輪)を見たところ



これは「ホツケ田」



「こぶし野」辺りから公方様の森(一ノ曲輪)と御所沼(水堀)を西方向に見たところ



さて、正面は公方様の森(一ノ曲輪)の北側にある富士見塚



ここは、その更に北側にある浄円坊池(蓮池)/前方の木々の所が徳源院跡のようだ





ここが明治初期に廃寺となった徳源院跡



標柱と説明板が立っている



「史跡 古河公方足利義氏墓所」とある



茨城県指定文化財

史跡 古河公方足利氏墓所

昭和三十七年七月七日指定

古河公方五代目の足利義氏は、正徳十年(一五八二)十二月

古河城で没した戦乱の中、華儀(くわぎ)として、一年正月久喜崎玉果の
甘棠院で行われ、その近くに香雲院(こううんいん)という寺が建てられたが
今は残存しない。

この墓所は義氏ゆかりの寺があった関係で遺骸をいし

その一部が埋められたものと考えられる。明治初年までは

鎌倉円覚寺末の徳源院(とくげんいん)という義氏の娘氏女(むすめ)の法号に

ちなんだ寺があったので「徳源院跡」と呼ばれていた。

義氏の墓石はないが氏女とその子義親(よしかち)天寿院殿の

宝篋印塔(ほうきやくいんとう)七地蔵を刻んだ石は子孫の足利氏による

古河公方義氏公墳墓(裏面に墓地(むらに)修(しゆ)の文)の碑がある。



1 公方足利義氏の墓

2 足利氏女の石塔

3 足利義親の石塔

石幢

古河公方義氏公墳墓(標石)

大正十五年埋碑

平成九年九月四日

茨城県教育委員会

大きな宝篋印塔が氏姫の子・足利義親/石囲いがある小さな宝篋印塔は氏姫/中央の石碑の右奥の大きな木は土塚となっていて古河公方・足利義氏の遺骸の一部が埋葬されているらしい



中央の石碑には「古河公方義氏公墳墓」と記されている



別の角度から徳源院跡を見たところ



「元屋敷の桃林」と記された標柱があるが・・・



さて、ここは公方様の森(一ノ曲輪)の北東側にある虚空蔵様(古河虚空蔵菩薩)





右手は富士山浅間神社



虚空蔵菩薩と申しますと古くは、僧侶修験者によつて秘法中の秘法として信仰護持されてきた菩薩様であります。又、死者の冥福を祈る十三仏の最後の十三番目、いわゆる最終的な極楽浄土への導者、死霊から祖霊へ、佛から神へ昇化する導者であります。一般的には丑寅年生まれの方の守り本尊であり、また十三歳詣りでご承知の通り、お子様の受智育成の知恵と財宝を守る菩薩としても知られております。当地の奉安する虚空蔵菩薩は文安年中の開基にして足利義満公が非常に信仰されて以来、代々篤く信仰されてきた尊像であり足利成氏公（古河公方）の代に公方家の館より東北（丑寅）の現在地に辰崎の古河城跡地より同じく鬼門除として移転されたと伝えられております。

左手は足利一族供養碑のようだ



こちらが虚空蔵菩薩堂





虚空蔵尊と記された扁額のような



こんなものも





すぐ近くには収蔵庫があった



徳源院にあったものらしい

茨城県指定有形文化財 彫刻

木造地藏菩薩坐像

昭和四十一年三月七日 指定
古河市大字鴻巣字中山三九六番六

この尊像は子育てに功德があるとの信仰から、子安地藏尊の名で知られています。もとは、第五代古河公方足利義氏の娘・氏女の菩提寺であった徳源院内にあって、氏女の守本尊ともいわれていましたが、明治初年の廃寺後、何度かの移転を経て、ここに安置されました。

この像は、左手に宝珠、右手に錫杖を持つ、像高六十・三センチの坐像で、寄木造・玉眼・漆箔という技法によって

造られています。鎌倉時代の作という伝承もありますが、無銘ながら、その作風から判断すると、造像年代は、南北朝～室町時代であると思われる。



平成十一年三月

古河市教育委員会

さまざまな石造物がある



収蔵庫の裏手を見るとマウンド状になっている



こんな塩梅で、土塁の名残なのか・・・



これはその付近にあった別の土塁状のマウンド/広い範囲に遺構が残存しているのかもしれない



参考ホームページ

<http://iyokakuzukan.la.coocan.jp/008ibaraki/080koga/koga.html>

<http://otakeya.in.coocan.jp/info02/kogaj.htm#kogakubo>

<http://umoretakojo.jp/Shiro/Kantou/Ibaraki/Kounosu/index.htm>

<http://blog.aoplanning.com/general-ground-koga-kubouyakata/>

<https://blog.goo.ne.jp/ihcirot/e/9c3356746c785c6282d5cad7091c90ab>

<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/bunkazai/ken/shiseki/12-3/12-3.html>

<http://www.uraken.net/museum/castle/shiro06.html>

